
survival • area

関k o u関

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

survival・area

【Nコード】

N7199Y

【作者名】

nkoune

【あらすじ】

記憶を失った少年

日常を失った少女

……何も分からない……

この荒んだ世界で、
失意の果てに二人は出会い、旅をする。

失った記憶を探す少年

過去へ帰る方法を探す少女

幾度となく目的は揺らぎ、

希望は崩れ…

沢山手に入れ、

沢山失い、

本当に大切なものを

二人は見つけていく……

数々の思いと

多くの屍を乗り越えて

再びこの地へ集う。

ここはArea 0（ゼロ）

二人が出会い、

あの日全てが始まった。

“Area・0（ゼロ）” 『プロローグ』（前書き）

読者の皆様。

こんなド素人の作品を視界に入れて頂き、そしてあるうことが開いて頂き非常に有り難き幸せに存じ上げます。

…とまあこんな堅苦しい喋り方は苦手（笑）なのでもう少し砕けていきます（、、、）
とりあえず僕は学生です。

健全で頭脳明晰（笑）、容姿端麗（笑）、絶体絶命（？）な模範生徒（失笑）なのであまりテンポよく出来る訳では無いですが、平均2週間に一度くらいのペースで投稿したいと思います。

さてさて記念すべき第一作品である『Survival・area』は
ヒロインである『萩原 美月』が突如として地面に発生した黒い穴に落ち、未来に飛ばされ、記憶を無くした少年（主人公）に出会い旅をするという話です。

細かい内容は読んで頂ければ分かるでしょう。

それでは、

『Survival・area』

始まり始まり〜 (^o^)
/

“Area・0(ゼロ)” 『ブローグ』

見渡す限りの荒れ地。

夜にしては妙に明るいが、月明かりのせいだろう。

まるで時間が止まったように静かだ。

平坦で広大な地面は、

AHT現象によって所々焦げて、ボロボロになっている。

AHT現象 (area・heat)

正式名称、

熱原高密度収束型焦土地域化現象

原因は全く分かっていない。

発生時期は一年に1〜3回という以外はほぼランダムで、発生した場所は、緑豊かな大地でさえ一瞬で焼け野原になるレベルである。

気温にして約1200

この温度に到達するまでかかる時間は約20分前後。

AHT現象が発生する際、発生地域周辺は逆に温度が物凄い勢いで下がっていく。

熱が収束する事によって発生しているのではないかと、『予想』から“熱原高密度収束型焦土地域化現象”という名前がついた。

ちなみに発生するのはArea-0だけである。

そんな地獄の果てに、
今一台の車が走っている。

一応Area-0には幾つか組織の施設があるが、一番被害のひどい中心部に足を踏み入れるものは殆どいない。

車の中では二人の男が話していた。

大きく揺れる車内には、外とはまた違った静寂に包まれている。

「本当に…これでいいんですか？」

敬語を使い、細身で眼鏡をかけている運転手の男は大体30歳前後だろう。

助手席に座った、がっしりした体格の50歳はあるであろう男は重く口を開いた。

「ああ…、これが俺達の『仕事』だ。」

「…でも…上はいつも『やれ』としか言いません。」

それが正しいか、

間違っているかも…

しなければならぬ理由も…

…何も…何も教えて貰えないのに…

貴方みたいさらっと片付けることなんて出来ませんよ。」

細身の男はかなりの嫌味を含めて、

吐き捨てるように言った。

「…悩もうが苦しもうが最後にはやらねばならぬのだ。」

そうしないと矛先が自分に向けられる。

死にたくなければやるしかない。

…それだけのことだ…。」

体格のいい男は苦虫を噛み潰すような顔をして、軽いため息をついた。

さっきまで嫌味口調だった細身の男にもその意味は通じたらしく、彼もまた、何も喋らなくなる。

外の景色は変わらない。

しばらくして体格のいい男が先に口を開いた。

「でも…今回は、いつもと少し違う。

上の奴らの顔を見りゃあわかるさ。

あれは何かを必死で隠そうとしている顔だった…。

…まあ…、

俺たちは所詮組織のパーツだ。裏があるとわかったところで…大したことは出来んがな…。」

「パーツはパーツらしく…この“敵”を始末しろってことですか…?」

「上はそう言ったが、殺すつもりはない。少なくとも俺はな。」

「……………?」

「裏を暴くなんて格好いいことは言えんが、何でもかんでも言いなりなんてのは癪だからな。」

「随分といきなりですね。普段の貴方は何処へ行っただんですか?」

「個人的だが理由はあるさ。

こいつが時代の流れを変える。

この血生臭い時代に何かしらの風を吹かせる…。

俺にはそんな気がしてならんだ。
なんせ一人で…あれだけのことをしでかしたわけだからな。

「」
体格のいい男はニヤリと笑った。

「笑いごとじゃないですよ。
こいつがどれだけの人を殺したと思ってるんですか。」

「こいつはまだ若い。
一度くらいチャンスを与えてやってもいいんじゃないか？」

「自分の予感なんかで命令を無視するなんて、何か悪いものでも食べましたか？」

「…相変わらずお前は一言多いな…。
まあただの気まぐれさ。気にするな。」

細身の男は短くため息をついた。

さつきよりは短い沈黙の後、細身の男がすぎるように呟いた。

「私達がしていることは正しいんですか？…私の家族は…救われるんですか？」

「…救われる？ …成程な…お前も騙された口か…。考えてもみる。こんなボロボロになった世界で、他人を思いやる余裕があると思うか？」

「…じゃあ見捨てると…？
血の繋がった…家族を？」

「今は少し悲観的過ぎたな。
まあこんな状況でも自分を見失わなければ、大抵のことは何とか
なるさ。」

それに俺たちがしていることの善悪なんて…もう誰にもわからんよ。
そもそも基準が何処にある。」

「それでも私は…自分を正当化する口実が欲しいんです。
…今さらかもしれませんが。」

「そんな考えが浮かぶ時点で、お前はまだマトモだな。」

「……………」

細身の男はハンドルを握りなおし、
何がを振り切ろうとするようにアクセルを踏み込んだ。

2192年

急激なインフレによる市民の暴動が発生。これにより、政府組織と市民のみで構成されたレジスタンスという二つの派閥に世界が真っ二つに分かれた。

その後、市民を失った国の行政は完全に崩壊。

分かれた二つの派閥はこのあと200年にわたる戦争を繰り広げる。

それにより皮肉にもあらゆる技術が発展し、武器や端末等様々なものに影響を与えて多大なる進歩を遂げていた。

2385年

既に戦争の目的はお互いのエゴの為では無くなっていた。

勿論理由は生き残る為。

土地、資源、技術、食料、何でも奪って生きるのが当たり前。

そして膨大な人数を抱えていた政府組織は裏切りが多発。

内乱が起こり、さらに何百もの組織に分かれた。

そして今、2463年…

別れた組織は別々の生き方を見出し始める。

自ら食料や兵器等を作りだす者、

情報等を他の組織に売って利益を得る者、

他の組織から奪う者…

今でも銃などの武器を持ち歩くのが当たり前という、生き抜く為の
暗黙のルールは変わっていない。

この二人もそれぞれ武器を装備している。

細身の男は腰に散弾銃、“ベネリM4”を、
がっしりした男は突撃銃、“M4カービン”（オプション：消音器
レーザーサイト）を2つ背中に担いでいた。

今の基準では、これでも割と軽装備だ。

無言のまま一時間が過ぎ、目的の場所に到着。

ここはかつて巨大な城塞都市があったらしい。

今ではもうその面影もないが。

体格のいい男は車から降りた。

暗くて遠くまでは見えないが少なくとも人の通るような場所ではない。

細身の男は運転席に座ったまま、
左手を低めに前に出し、人差し指と中指を揃えて左に20cm程動かした。

空中に青い光のラインが浮かびあがる。

左に動かした左手をそのまま弾くように上にあげると、空中に立体映像のウィンドウが表示された。

“ホログラフィー・パーソナル・モバイル”通称『HPM』
見た目は腕時計のようだが、装着している腕を動かすとそれが起動の合図となり、ホログラフ（立体映像）を利用した端末の画面が空中に表示される。

アップデートはプログラムメモリーさえあれば可能。

個人で特別なプログラムを開発しているものもいるのでコピーさせて貰えば、コピーした方の端末でも使えるようになる。

余談だがプログラムを作るプログラムはデフォルトで入っている。

その画面を操作することにより、メール、電話、その他諸々の便利機能が使える。

便利機能の例として物質転送を利用した格納機能が搭載されているため、多大な量の武器等を持ち運ぶことが可能。
しかしこれには、デメリットがある。

出現させるのに時間がかかるのだ。

そのためHPMを使用する人は皆、戦闘に使う武器はホルダー等に入れて直接装備している。

ちなみに試作段階終了が半年前なので持っていない人も多い。

HPM開発前までは端末の形状は携帯電話と同じ形だったため携帯電話を未だに使っている人は珍しくない。

リストタイプじゃなくて手に直接チップを埋め込むタイプも非公式に開発されたが開発した組織が開発の2日後に壊滅したため、世界中に6つしかそのチップはない。

チップの存在を知る者はほとんどいないし、壊滅の理由を知る者は、さらに少数。

少なくともこの二人はどちらも知らない。

細身の男はホロキー（ホログラフ・キーボード）を叩いて報告書をまとめ始めた。

体格のいい先輩口調の男は大きく細長い、全長2mのバックを担ぎ上げ、廃墟の方向に歩いて行った。

「「自分を見失うな」…か…。」

細身の男は一人呟いた。

“Area・0（ゼロ）” 『プロローグ』（後書き）

いかがだったでしょうか

HPMは今の世界でいうケータイのようなものです。

皆気軽に使えます

バンバン出します。

ホロキー打ちまくります。

それはさておき、

1話は主人公が出てきます。

ヒロイン目当ての人はもう少し指をくわえて見ていてください（キラッ）

それではまた次回。

お楽しみに〜

第1話 “Area 0 (ゼロ)” 『さ迷う狼』 (前書き)

お久しぶりです。

遅れました。

非常にすいません。

学生ですいません。

…… 気を取り直して、
今回は主人公の話です。

主人公は記憶をなくしている訳ですが、一概に記憶と言っても複数
あります。

あまり詳しく知らない方も多いのではないのでしょうか。
記憶とは大まかに次の2つに分けることができます。

エピソード (起こった事象) を司る、エピソード記憶

知識を司る意味記憶

簡単に言えばエピソード記憶がアルバムで意味記憶が辞書とお考え
下さい。

エピソード記憶がなくなった場合、

漢字は読めるけど、いつ習ったか分からない。フルーツが美味しい

食べ物と知っていても、どんな味かは分からない。

……といった具合です。

主人公が失った記憶は全てのエピソード記憶とお考え下さい。

ですので、目が覚めた主人公がいきなりばぶばぶ言いながらハイハイしたりは絶対にしませんのであしからず（笑）

長くなりました。すいません。

それでは、記念すべき第1話、

始まり始まり〜

第1話 “Area 0 (ゼロ)” 『さ迷う狼』

目を開けて最初に見えたのは、

雲一つない星空と満月、

そして周りにそびえ立つ建物。

体を起こして辺りを見回してみると、

今にも崩れそうな廃墟があちこちに建っていた。

どうやらここは何処かの街のあとらしい。

でも…何で俺はここにいます？

……わからない……。

ここに来た理由……

気を失う前に起きた事…

家族や知り合いの顔…

…自分の名前、存在さえも…。

自分が記憶を無くしていることに気付くまで、
そう時間はかからな
かった。

しかし、記憶がないことに気付いたところで、
どうにかなる訳でも
ない。

「……………寒い。」

かなり気温が低い…。

血がシャーベットになりそうだ。

俺は一先ず記憶より人型アイスになりそうなこの状況からの打開を最優先にする事にする。

冷たい地面から腰を浮かせ、立ち上がった俺はもう一度辺りを見回した。

俺がいた場所の一番近くにあつた廃墟は壁に大きな四角い穴があり、3分の1だけ残つた窓硝子にぼんやりと自分の姿が映る。

黒い長袖、

黒い長ズボン、

黒い皮のジャケットを着た、

全身黒づくめの少年がそこには立っていた。

自分の姿にさえ見覚えはない。

昔は人が行き交い活気づいていたであろう道には、骨が無数に転がっている。

腕や足の骨だけならまだ何かの動物と勘違いすることも出来たんだが、側に落ちている頭蓋骨が俺に更なる確信を持たせた。

……あれは人の骨だ……。

街には冷たい風の音が虚しく響きわたる。

人どころか、動物の気配さえ一切ない。

……この街から出よう……。

俺は骸骨だらけの通りを、早足で歩き始めた。

丁度俺がいたのは街の端の方だったらしく、外に出るのにそこまで時間はかからなかった。

街の入口を通り抜けた俺の目の前に広がるのは、見渡す限りの荒地。

地平線の果てまで何も無い。

行く宛てもない。

どの方向に歩こうか考え始めた俺は

ふと、空を見上げた。

……じゃあ……

……月のある方に行こう。

俺は適当に決めた方向に向かって、
ふらふらと歩き出した。

手に届きそうなくらい月が近い……。

決して、届きはしないけど。

どれだけ歩いてても、見える景色は変わらない。

……進んでいる気がしない。

……このまま何処にもたどり着けないかもしれない……

時間がたつにつれてそんなネガティブな言葉しか浮かんで来なくなってくる。

俺は…考え事をやめた。

その後無気力のまま歩き続けた俺は、6時間程たった頃に地下への入り口を見つけた。

若干空が明るくなっているので午前4時ぐらいだろう。

気温はまだまだ寒い。

不自然に土からコンクリートに切り替わった境界…、
先は地面の下への坂になり、その先は人工のトンネルへと続いていく。

俺が見回した限りでは人影は見えない。

理由もなく慎重になりながら俺はトンネルの奥へ歩を進めた。

それからしばらくは別れ道を見つけては勘で曲がり、別れ道を見つけては曲がるの繰り返し。

面倒臭い。

延々と同じような道続きやがって…

もう50〜60回は別れ道に会った気がする。

今の俺の状況。

まず、俺は施設内での自分の位置を把握出来ていない。

そして俺丸腰。

路頭に迷う俺の頭にふと、考えうる限り最悪の可能性が浮かぶ。

これはもしかしたら……

いや、もしかしなくても……

……迷った……。

それでも確実に進んでいるのは間違いないらしく、ドアが幾つか視界に映る。

とりあえず俺は一番近くにあったドアの前に立ち、ノブをそっと引っ張った。

さ迷い続けること数十分……。

とりあえず俺は発見12回目になるドアを開け放つ。

俺はさっきまでの11回の結果を思い返していた……。

外への梯子……3回。

完全空き部屋……2回。

開かない…6回。

そして今回初めての…

「誰だ貴様っ!!!」

…人がいた。

アサルトライフル構えた3人の男性が、突然の招かれざる客（俺）に照準をあわせている。

一人だけやたら武器がごつい。

あのごつさを素人用のサポートパーツによるものと思つか…、強化用のカスタムパーツによるものと思つか…

後者だろうな。

……………多分。

リアクションは三者三様だったが俺への敵意は間違いないものだ。

考え事に浸っている暇は無い。

よし、ここは何事もなかったかのように……

『ガチャ』

俺は無言で扉を閉め、その場を後にした。

……………。

『ガチャ』

……うん、やっぱり出てくるかあ〜 W W W

「……………何のつもりだ？」

『ダッ』

俺は思い切り地面を蹴って、

逃げ出した。

「貴様アツ！ 止まれっ！！」

もう逃げるしかない。

銃持った相手に、手ぶらで挑むなんて無謀なことではできねえし…。

《緊急事態発生！！ 緊急事態発生！！

防衛班ユニット6からB1-f区画にて、

侵入者発見との報告あり！

侵入者の情報は今から防衛班のデータベースと端末に送信する！

直ちにこれを排除せよ！！

繰り返す！…》

はいはいそーですかもうですか。

……が…ガチっすか…？

後ろからさっきの3人が銃を構えて追いかけてくる…。

アイツらがいる限り警報は消えないだろう。

侵入者発見したご本人様達でいらっしやるからな。

この目先の3人を撒くべく、俺は頭フル回転で作戦を練り始めた。

… 勿論走りながら。

状況確認。

1、俺は今、銃を所持した30〜40歳の男性3人に追われてる。

2、道のわからない地下施設で、闇雲に曲がってこの3人を撒こうと爆走中。

3、見つかったから多分10分以上経過。

4、さっきの警報の内容から、伏兵多数の可能性あり。

… 結論。

分が悪過ぎる。

大人しく投降。

……いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……

無理。

十中八九殺される。

…結論 (take2)

ここは相手の虚を突いて…

俺の必殺奥義… “^{ハッター}HATTARI” をくらっがいつ！

……いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや……

俺っ…！

何を言っつもりだよっ…！

……中略……

…結論（take16）

逃げよう

………はい、作戦考案前と一切変化なしwwww

ちなみに俺の思考がここに至るまでに有した時間、約30秒。

もう脳内作戦会議の議員も若干ヤケ気味。

正直俺の体力もかなりヤバい…。

俺は手近なドアのノブをひっ掴んだ。

…開かない…。

…これも…。

…これも…。

……ん？

……そういえば……、

俺の姿を見てるのって……

あの3人だけじゃね？

手ぶらで銃持った奴に挑むのは自殺行為だが……

このまま逃げても警報がなってる以上は増援が来る可能性が高い。

逆にあの3人さえ片付けてしまえば増援の方はやり過ごせるかも知れない。

気付いてしまえば、簡単な事じゃねえか……。

3人か

それとも大群か

……まあ、考える迄もねえよな？

俺は、走るのをやめた。

*

俺は今、
走っている。

こんな長時間走っているのにあのガキはまだ走り続けてる…。
疲れる。

マジ死ぬ（俺が） 　　ってか死ぬ（ガキが）

侵入者逃がしたら俺らの命がヤベえし、追っしかないわな…。

俺達から逃げるガキの背中を見ながら、俺は一つ思う。

どうしてこうなった…（　；　；）

…

…

今日は何故か非常に寝覚めが悪かった。

…何故かって？

寒いんだよ、ちくしょうめ。

俺が昨日寝る前に被った布団は毛布2枚に掛け布団2枚というフルコーティングだった筈なんだが、朝目を覚ましてみると布団全てが俺の上から消えていた。

寝相の悪さが災いして、布団を全部自分で蹴落としていたのだ。

蹴落とした布団を再び被り、HPMを起動した。

黄緑色のホログラフでメニューが表示される。

時間はAM4:13

気温は - 2

死にかけた。

マジで。

4:30にはここを出なければならぬから暖まることもなく、俺は着替えを済ませて部屋をでた。

そして朝飯は安物の味無しレーション…

最近目に見えて支給品の質が落ちている。

まあ…贅沢言ってもらえないのも分かるんだが……。

不味い朝飯を冷たい水でしめた俺は、着替えを済ませて防衛班『ユニット6』の待機室へ向かった。

俺はユニット6のリーダーでもある。

『反政府第a-6戦線（AGF-a6）』

このコロニーを管理している元レジスタンス組織の名称だ。

レジスタンス組織だったのは過去の話であり、今は食料や資源を求めて攻撃を仕掛けてくる敵組織からの防衛と資源調達の為の侵攻、この2つに重点を置いた一種のアーコロジになっていた。

ちなみにアーコロジとは、それ単体で生活を完全に賄える施設の

ことをいうらしい。

確かにうちの施設の中にある工場で飯とかは作られてるが…

……………不味いんだよな……………。

最近の防衛班はかなり暇だ。

理由は勿論敵が攻めて来ないから。

しかしこう長いこと暇だと生活が苦しくなってくる。

仕事が無い＝収入が無い

他はどうか知らないが、うちでは働いた分をポイントとしてユニットごとに振られる。

そのポイントを通貨として使って飯や日用品を買うわけだ。

仕事の量に応じて収入も増えるし、仕事をしてる奴程いい部屋を貰える。

半年に一度どれだけ仕事をしたかの集計があるのだがかなり前から防衛班はランキングの下半分を占めるようになっていた。

敵が来ないのに守る必要も殆どないわけで……………。

俺はいつも通り18畳程のユニット6待機室で部下である2人と駄
弁りながら警備の交代時間を待っていた。

支給品の愚痴、

出撃要請率の低下の愚痴、

施設が悪いことによる体調不良の愚痴…、

今更ながら愚痴しか口に出して無い気がするが、細かいことは気に
しないでおこつ。

俺はふと時間が気になりHPMを起動した。

あと20分程で警備の交代時間だ。

2人に準備を促し、俺も壁に立て掛けてあつたB・eを手にする。

ちなみにB・eは最新鋭アサルトライフル『血を喰らう者（Blo
od・eater）』その略称だ。

B・eは部下達の持つ安物量産品のAK-47とはスペックが圧倒
的に違う。

スナイパーライフル“SR-25”にも使われる7、62mmNA
TO弾を1秒間に6発撃つという規格外にも程がある化け物っぷり。

その肩を踏み砕くような反動は衝撃吸収用の特殊ゴムと炭酸ガスに
よってサブマシンガンと同量まで削られる。

有効射程は530m。

銃身とスコープには風速、反動等を一瞬で計算し、銃弾にリアルタイムで一発一発に回転をかけて、弾道を変えながら敵を捉え続けるコンピューターが内蔵されている。

要するに、

ズブの素人でも敵のいる方向に向けて引き金を引けば、B・eの細身の銃身から撒き散らされる7、62mm NATO弾全てが、敵の体を勝手にぶち抜いてくれるって訳だ。

最新鋭とはいえプロトタイプ試作品。

試作段階では思わぬ事故やトラブルも多い為、使用前にはHPMでスキャンをかけなければならぬ。

正直仕事はパトロールだけだからこんな物騒な物使う筈もないが…
手ぶらの警備員つての間抜け過ぎるからな。

仕事に『見栄え』という私情を挟みまくる38歳の今日この頃WWW

それはさておき、B・eを机の上に置いてHPMを起動する。

《スキャン開始

… 20%完了

… 40%完了

… 60%完了

…80%完了…

…スキャン完了。異常無し。》

よし、俺の準備も完了。

残りの4分間どうしようか考えながら椅子を引いた……その時。

『ガチャ』

「……………」。

「誰だ貴様っ!!」

部下の一人がタイミング良く反応してくれたから俺も敵だと理解する。

突然の侵入者に全くリアクション出来なかった事はこの際どうでもいい(汗)

とりあえず銃を構えて威嚇してみた。

「……………」。

「……………」

『ガチャ』

……………閉めやがったああああああああつっつっ！！！！！！？
？？？？

慌ててドアに駆け寄りノブを引く。

侵入者は何事も無かったように歩いていった。

「何のつもりだ？」

『ダッ』

……………逃げやがったああああああああつっつっ！！！！！！？
？？？？

まちドウくすんのようにっ!!???

見つけた場合、

捕まえればそいつの危険度にあわせて報酬が出る。
逃がしたら殺される。

マジで（汗）

気付かなかった場合、

お咎め以前に関係無し。

報酬は無い。

勿論罰も無い。

……報酬が貰えない敵（ザコorガキ）の場合、

見つけた場合、

逃がしたら殺される。

捕まえても報酬なし。

気付かなかった場合、

一切何も無し。

特は無いが損も無い。

…つまり…、

スルーした方がお得。

…でも…

…報告…しちゃったんだよねえ……。

オラ死にたかねえーよつつっ！！！????

(誰だよ)(- - ;) ()

こうして、

この無駄マラソン

もとい、

侵入者とのおいかけっここが始まったのだった…… (泣)

…

……

…まあ要するに、

結論

色々あった。

……以上！

無駄に年食った体に鞭うって更にスピードを上げようとした…まさにその時。

立ち止まった。

あれだけ逃げ続けてたガキがいきなり…。

「ゼエ…ハア…、諦めたか…？」

随分スタミナがある奴だったが、もうあっちも限界みたいだな…。

B・eのグリップを握り直し、ガキに向ける。

「悪いな…こつちも仕事なもんで。…死ねやあつ！！！！！！」

《ガガガガガアアン……》

コンクリートの破片と砂ぼこりでガキの姿が消えた。

……どうせ報酬…無いんだろつな…（泣）

今の俺は若干の鬱と走り続けた疲労があるため一刻も早く寝たかった。

もう床でもいいから今すぐに倒れたい。

その場を後にしようと思つて後ろを向いて歩き出した俺は、ある異変に気付く。

…俺が持っていた筈のB・eが…

……無い……。

落としたかな？

いやいや！

あんだけしつかり握っていたのにそんなマヌケな事ある訳

>……ザリッ……<

……足音……？

穴だらけになった壁。

ぼろぼろになった天井。

破片が散りばめられた床。

……そして……

その場に立ちはだかる『無傷』の少年。

部下の二人も口をポカンと開けてフリーズしている。

しかし俺が驚いたのはあの弾幕の中少年が無傷だったことだけじゃない。

彼の目には何かの回線のような赤いラインが出ては消えてを繰り返していた。

>……ダンッ！……<

床を蹴る物凄い音の刹那、まるで映画のフィルムのコマを10程いきなり飛ばしたように彼の姿が消える。

>ゴスツ<

「……………が…はっ…!?!」

突如腹に走る鈍痛を最後に、俺の意識はゆっくりと薄れていった。

*

「……………おお……………」

銃を持ったオッサン3人を手ぶらの俺が傷一つ負わず気絶させたんだから、まあ自分の口から感嘆の声が漏れるのも仕方がないと思う。

…俺…強くな?

どちらにしる気絶した警備員が見つかったら警報は消えない。

何処かにこれ（気絶した3人）を隠すべく俺は細く暗い通路を見回した。

俺が探しているのはドアだ。

さっき開けたドアは12回中2回が空き部屋だったから確率は1/6になる。

一応通路の突き当たりにドアがあるのを発見したが、確実にあれが空き部屋とは限らない。

何も考えずにあれを開け放って敵がいたら警報鳴らされ、敵が増えて、はいおしまい…ってな訳だ。

またさっきみたいに都合良くはいかないだろう。

この3人を放置しても結果が同じなら消去法であのドアを開けるしかない…。

…じゃあ…開けるか…。

特に意味もなく忍び足になりながらドアに近づき、ノブを引く。

「…………お邪魔します…。」

.....
.....
..... 空き部屋.....?
.....

警備の甘さと自分の運に感謝しつつ、さっきの3人を部屋に引き摺り込む。

俺はこの後の行動について、作戦を練り始めた。

題して『乗り物貰って逃げよう作戦!』

..... 我ながら..... そのまんまだな.....。

1、見つからないように中を探索。

2、乗り物を発見次第強奪。

3、逃走

結果、移動手段確保。

予定はバツチリ。

とりあえず今はこの3人が目を覚ます前に部屋を出よう。

ドアを開いてまた通路に出る。

勘で右側に歩き出し、今度は次のドアを見つけるまで1分もかからなかった。

そのドアをまたゆっくりと引く。

中に明かりがついているのには気付いているが、人がいると決まっ
た訳じゃない。

そのまま中に足を踏み入れた。

第1話“Area 0（ゼロ）”『さ迷う狼』（後書き）

……いかがでしたでしょうか。

ご不満があれば何度でも直しますので感想は辛辣にお願いします。

次回予告

2話はヒロインが登場します。

ヒロイン目当ての方は、お待たせしました。

主人公目当ての方は、3話をお待ち下さい。

それでは再来週、もし貴方がまた見て頂けるなら、

また会いましょう（＾o＾）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7199y/>

survival・area

2011年12月19日01時54分発行